



9/10花巻まつり(岩手県)

「正しい」とは何が「正しい」のか？

伝統とは？時代を越えて伝え続けられる文化や技術。それは、伝えるだけの価値があるということ。何かを正確に伝えられるというのは、既に完成されているからだろうか？

今から10年以上前、大学の卒業論文のテーマとして伝統技術を選んだ。偉そうなことを言うけれど、大学の卒論というのは卒業するために書くレポートのようなものだ。興味のあることや、研究室のテーマを引き継いで、論文とかたちにまとめればいい。だから、世紀の大発明とか、革新的な事例とか、そうではなく、興味のあることをオフィシャルに伝える練習だと思えばいい。そして、論文を書いても、卒業しても、何かのスペシャリストなわけではない。と、誰に言われたわけでもなく、そう勝手に思い込んで、工学部なのに手仕事をテーマにしてみた。

伝統的技法とされている木工技術を知るために長野県へ。長野県木祖村という村は、木材が豊富な宿場町。昔から木材加工や宿として栄えてきた。けれど、現在は衰退して、人口減少で。。。というのはよくある話。村を歩いても誰もいない。見かけても高齢者しかいない。街に若い人がいないというのは、大学生の当時、異様な光景に写った。

長野県に行きたい理由。その②。日本のギター産地No.1だから。僕が買いまくっているHEADWAYの工場がある。これだけで、僕には長野は最高の県である。

聞き書き調査を進めるうちにわかったこと、それは、時代はめぐっても、職人たちは「伝統」という渦の中にいるということだ。伝統的技法と言えるほど、正確に受け継がれてきた技術、その正確さ、つまり正しさは、時代が変化しても、いつまでも正しくあり続けるのだろうか？

歴史的にも日本の職人という世界は徒弟制度が基礎となっている。それは、芸術家と職人が異なるように、職人とは仕事として成立する技術をもつ技能者である。手仕事でありながら、同じものを、同じように、正確に、期限までに、という具合に。そうやって、受け継がれ成立した文化だ。

時代が変化すれば、ライフスタイルが変わり、経済が動く、日々、生み出されるメインカルチャーに対し、新旧が入り交じり、文化が躍動する。そして、何かが台頭する。
その中で、伝統という言葉を負った職人たちが、職人であり続けるために、選択肢は2つしかない。「守る」か「挑戦」だ。

僕は、何かを作る人が好きだ。人が何かを作れるというのは価値あることだと思う。
今でいうクリエイターという意味合いではなく、何かに執着して、一人で突き詰めようとする、その異常なまでの好奇心、情熱が好きなのだ。
人生において、自主的に、そこまで打ち込めるものを見つけた人間は限られている。だからこそ、その人たちが作り出す空間的世界観は人に何かを訴え、伝える力があるはずだ。

職人は芸術家ではない。しかし、何かを作る人である。
何かを作る、または作れる人は、そうすることが出来るエネルギーを持っている。
結果として、長野県木祖村の木工製品は、安価なプラスチック製品の台頭により、衰退した。そして、後継者不足から、その産業はほぼ無くなり、過去の伝統となり、村の歴史となった。
職人たちは伝統を背負いながら、いずれは衰退する技術に、何を考え、何を思い、そのエネルギーを費やしたのだろうか。

伝統といえるほどの正確さをもってしても、時代の変化という岐路に立ち、選択の必要性に迫られた時、その伝統が「正しい」のか「正しかった」のか決まる。
きっと「正しい」というのは、「そう決めた」という程度のことなんだと思う。

手仕事だけが持つ技術 “味”

「毎日作ってるけど、一つ一つ違うよ。何か違う」

長野の職人から聞いた話で、ずっと引っかかっていた言葉。

「何かが違う」これを言葉で説明するのは結構難しい。

たとえば、フィルムカメラを開発するとする。
大きく分けて、良いカメラを作るには、優れたレンズ、優れたシャッター、優れたフィルムが必要だ。

レンズは光学の知識と高度なガラスの研磨技術。
シャッターは材料工学や機械設計技術、精密な組立技術。
フィルムは化学の知識が必要。

こうした、高度で「正確な」技術というのは機械化されていく。精密さを求めるならば、機械にはかなわない。
機械ならば均一に研磨でき、精密に組立、安定したフィルムを作れる。

すべて手仕事によるカメラ。クラシックカメラは優れているのではなく、味があるのだ。
この味というのが、人を惹きつける。
味があるとは何だろう？
それは、人を感じられるかどうかだと思う。

ICチップで制御されたカメラは、プログラム通り動く。
1/250のシャッタースピードを設定すれば、カメラがどんな状態でも、その正確なスピードでシャッターをきる。
クラシックカメラはギヤ、ビス、バネ、グリス、羽などいくつもの部品を伝い1/250というスピードを出す。
しかし、厳密にはズレている。ビスの緩み、羽の摩耗などを考慮したら、正確なスピードは出せないのだ。
でも、それがいい。味なのだ。

よく考えてみれば、1/250である理由はない
写真を撮るとは、シャッタースピードとF値。要は、光をコントロールする技術、それをフィルムに焼き付ける技術なのだから、シャッタースピードの正確さは求められない。

この「正確さ」を求める世の中は、結構厄介で、人だけが作れる感性の空間を奪っていると思う。

宮大工は、木組みで隙間を作るという。意図的に隙間を作るというのは、機械でいえばエラーだが、それが伝統、ベストな選択、伝統技術なのだ。その加減は、人にしか作れない手仕事だと思う。
そして、これが人の技術、知恵、伝統、プライド、文化、進歩…etc。つまり、人が決めた正確さであり、正しさである。
こうした一連のことすべてが、人を惹きつける“味”なんだろう。